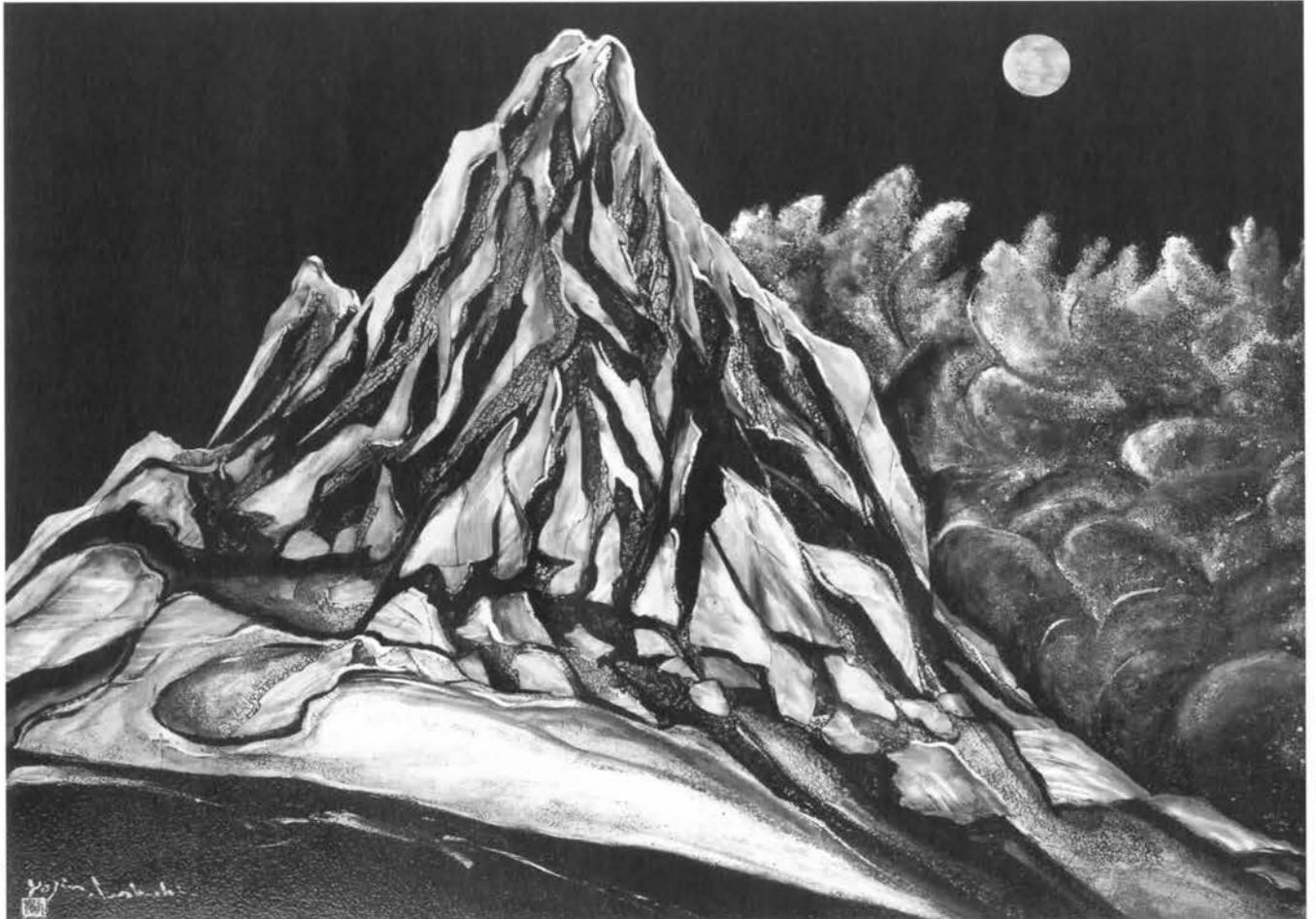


# 山と博物館

第54巻 第2号 2009年2月25日

市立大町山岳博物館



「孤高の刻」

漆絵画 (F50)

## 「山と祭り漆絵画展」に寄せて

岩淵 陽人

この度、日本の屋根とも言われ、衆人の憧れの的である北アルプスの玄関口・大町市にある国内随一の山岳専門博物館で、私の作品展「山と祭り漆絵画展」が開催されることは、幼年の頃より、雄大な山々を仰ぐこの地に育まれてきた私にとって、この上ない幸せです。

私は八歳の頃から、宗教哲学者の父・大殿に墨絵の手ほどきを受けました。父は、「絵を描く時、何を感じるか？上手く描こうと思うな、技巧に走るな、自分の意図し、表現したいことは何かを先ず考えよ。」と教えてくれました。「絵は人生の羅針盤たるべきで、創作意欲の高揚が自らの存在価値を高め、生の喜びをもたらしてくれるであろう。」と諭してくれました。私は、今でも父のこの言葉を胸に刻んで励んでいます。

油彩画・水彩画・版画・水墨（墨彩）画等に手を染めて参りましたが、私だけの独自の表現世界を模索していた折、漆という画材に着眼、漆の持つ独特な色艶を作品に活かすべく挑戦し、その『成果』を、日本古来の伝統工芸品と一線を画すジャンルとして認知して欲しいとの願いを込めて、僭越ながら「漆絵画」と名づけました。色々な作品の内、今回は、厳しくも美しい山々と、その山なみに抱かれた風土に生きる人々の、生の輝きの証とも言える、躍動感あふれる祭りに絞って作品を出展致します。多くの方々にご高覧頂けたら、望外の喜びです。大町市・大町山岳博物館並びに関係者の方々のご厚意とご協力に心から感謝申し上げます。

(IAC美術会名誉会長)

# 画業来し方行く末

岩淵 陽人

## …色の原風景…

ある夜更け、突然の大音響で、寢床からはね起き、寝ぼけまなこで何が何だかわからぬまま、母を求めて廊下へとび出しました。私が小学校（当時の国民学校）一年生の頃のことと記憶しております。東京は原宿の家に、両親と二人の兄と二人の弟と書生と住んでいたのですが、父と母と長兄は既に庭に出て、大空を見上げておりました。家の中で色を映す程に空が燃え、右往左往する真っ黒い人影との対比に強烈な印象を受け、思わず「うわー、きれいだ！」と叫んでしまいました。父や母が黙して浮かべていた「涙」の意味を知る由もありません。

「静かにしろ。」と、私は父にたしなめられました。

昭和二十年三月十日の、あの恐ろしい東京大空襲の深夜、場違いにも、私はひどく興奮していたのです。赤・朱・金色・黒……など多様な色を鮮烈に見てしまったのです。以来、脳裏に刻まれたこの色たちは、わたしにとって色の原風景となり、今でも或いは夢



を彩り、或いは絵を描く時に頭をもたげてきます。

## …信州の自然に育まれた絵心…

その後、疎開を余儀なくされ、信州は会田村（現松本市四賀会田）の山深き岩井堂に移り住むこととなりました。ここは恵まれた自然の宝庫で、思う存分羽を伸ばし、のびのびと、「がった坊主」の幼年時代を過ごすことが出来たのです。ズボンは擦り切れましたが、岩山が滑り台になりました。お堂の千手観音像によじ登って昼寝してもパチは当たりませんでした。松の木の枝をむしり取って、「チャーチルの首をとったぞ！」と、凱歌を上げたものでした。山や川や草木や鳥などの自然は、子供心におもねず、へつらわず共鳴してくれました。

今にして思えば、この頃の体験が画家を目指す指していた私にとつて、良き糧になつていいると思えます。絵画に一番大切なことは、何を意図として描くかということだと思えますが、そのテーマの前提として、山と、川と、海と、大地と語り、喜び、楽しさ、嬉しき、厳しき、哀しみ、辛さなど人の心を感じ、読むことに役立っています。一枚のスケッチをするにも、ただ上手に形を写し、自然の色を真似るのではなく、対象の心をつかみ、よく噛んで再構築した、自分だけの内なる風景を描くようになりました。

作品作りに取りかかるまでに瞑想して何時間も、時には、何日



「岩肌」

漆絵画F50

もかかることがあります。初筆を下ろす時は、脳裏の画面がすべて完成しています。構図と言うより、平面に起承転結が表われ、彩色もされています。ですから、下書きは不要というより、邪魔になります。特に墨彩画の場合は、筆を変えると勢いを止めて、イメージがとんでしまうので、運筆（付立筆）一本で一気に描きあげます。

## …漆絵画の特異性…

しかし、漆の場合は、工程が複雑でとても時間がかかるので、趣を異にします。先ずうるし板（キャンバス）にチヨーク等で下絵を描くところからスタートするのですが、一気に着色しないと、硬化・変色してしまったり、にじみが生じてしまう恐れがあるので、したがって、高度なデッサン力と早描きが命となります。

漆にも種類が沢山あって、国産の漆は、主

成分が、水分が少ないウルシオールで純度が高く良質と言われているのに比べ、ベトナムやミャンマーの漆はラッコールが主成分です。

長所も短所もありますが、高温多湿という気象条件の下で、上手に漆を手なずけると、艶やかで質感のある作品に仕上がります。日本の漆より比較的かぶれ難いのも事実ですが、それでも大事なところが蝸足のように真赤にふくらみ、熱い、痛い、半べそかいて、現地の職人に笑われた事もありました。

一年の半分以上ベトナムに滞在して、今まで油彩画や墨彩画で描いてきた、色々なテーマを漆絵画に転写している私も、杜甫が「人生七十古來稀」と詠った歳を迎えましたが、漆絵画の奥義を極めるには、「六〇、七〇は、はなつたれこぞう、おとこざかりは百から百から。」と豪語された彫刻家・平櫛田中に倣わなければならないと、つくづく思うこの頃です。



「春を待つ里山」

漆絵画F30

# 制作こぼれ話

## …それは誤解だ！…

カンボジアのアンコールワットは、世界の三大仏教遺跡の一つとされているが、もともとは十二世紀にヒンドゥー教を奉ずるスールヤバルマン二世によって建立された寺院で、天女（アプサラ）や女神（デヴァター）の素晴らしいレリーフがある。ヒンドゥー教の遺跡は、インドを源流として東南アジアの各地に点在する。殊に遺跡にみるアプサラに惹かれた私は、テーマの一つとしてアプサラを描いてきた。それは、アプサラが、君臨して人間界を見下す遠い天界の存在としてではなく、触れば素肌のぬくもりすら感じられそうな、生命を内に秘めた官能的な姿として彫られているからだ。きつと、このアプサラを彫った石工、彫刻師たちは、王様の命とは言え、当代、当地の憧れの美女すなわちこの世



「若一王子神社の流鎧馬」 漆絵画F12



アン・ハナ・フ・ア・レ・ビ  
とも立派なバストである。そして、ラインが実に美しい。

の天女を思い、心をこめて刻んだのではない。だから、お国柄、土地柄によって皆違う。アンコール寺院群の壁面に佇む数多のアプサラは、躍動感にあふれ、艶めかしくも心とます笑みをたたえて語りかけてくる。とてもいい。私は、暫しスケッチの手を休め、両手のひらでそつと胸にさわった。静かに撫でた。アプサラの心に触れたかったのである。いにしえの名もなき石工のノミを感じたかったのである。

ところが、ところが……ここは、観光客でごった返す名所である。厳粛な気持ちでいたのだが、ふと気がつく周囲の雲行きがおかしい。男性は、遠巻きにニヤニヤ。若い女性は、「何よ、このスケベオヤジ。」と言わんばかりの白い目で見ている。つい今しがたまでスケッチブックを覗き込んでいた年配の女性は、興奮めしたようにプイっと姿を消した。「違うんだ、違うんだ。」と、慌ててスケッチブックをパラパラと開いて見せて、誤解を解こうとしてみても、もうあとのまつり。

## …大変だ！…

「カイナイライカイジー（何だ、何だ、この臭いは！）」  
狭い部屋中に立ち込める煙と異臭、その発信源である世にも恐ろしい黒い怪物に私は呆然と立ちすくんだ。事の顛末はと言うと：インドシナ半島東部に位置する南北に長いS字型の国がベトナムである。北部の首都ハノ

イに比べ、南部にあるホーチミン市（旧サイゴン）は亜熱帯気候に属し、街中をゆったりとサイゴン川が流れている。私は、そこに小さな工房を構えて漆絵画作品を制作している。一年中真夏というのが、漆という生きた画材を扱うのにも、私の体調にも至極具合がよいだけでなく、どこかなつかしい昭和の香りがする不思議な活気が気に入って、ベトナムの話になると思わず力がいはい。「観光大使」の気分、昨今のベトナムブームに火をつけたかと錯覚しそうだ。  
しかし、夢うつつ、ほんわか脳天気であるわけにもいかない。なにしろここ数年というもの、ベトナム経済の急速な発展に伴い、物価がぐんぐん上昇しているのである。画材も然り。良いものを如何に安く手に入れるか？自ら調達することとなる。



で、気に入った良品を選び、用意するのが大変である。仕入れてきた大量の卵の殻を工房で更に厳選し、最良のものを先ずは白色の彩色に使用する。その他の殻は、内側に付着している粘膜を丁寧に剥がしてからフライパンで焼く工程に入る。ここでアルバイトの小学生の出番となる。いつも顔を出してくる常連の子供たちがいるのだが、あるとき、メンバーが変わっていた。豆炭コンロにフライパンをかけてゆっくり炒っていくと、白い殻にだんだん色がついていく。新顔のA君、B君、C君にはそれぞれうす茶色、茶色、こげ茶色と割り当て、古参のD君は、一番時間のかかる黒と役割を決めた。暫しの休憩をとホテルに帰ったのであるが、少々疲れていた私は、ぐっすり寝込んでしまった。3時間ほど経っていたら、さでに夕刻。大急ぎで工房に戻ってみると、煙と異臭に包まれ、黒い怪物を戴いたフライパンを前に、煤けた黒い顔を上げてにっこり。歯だけが白い。  
D君が言ったらしい。「黒くするには時間がかかるから大変なんだ。だから、一番長く仕事をしてくれる僕が一番たくさんお金がもらえるんだ。」それを聞いたA君。「それじゃ、僕が一番少ししかもらえないのか？僕だって頑張るよ。」僕も、僕もと皆でしっかりと頑張るよ。張って誇れる「労働の果実」である。子供たちにとつて美術作品制作のための材料の色の階調が分かる訳がない。  
「ありがとう。しっかりと勉強しろよ。」全員に3時間目いっぱいバイト代を渡した。労働報酬をしっかりと握りしめて嬉々として家路に着く子供たちの後姿に、私は何か熱いものを感じた。（IAC美術会名誉会長）

# 「漆絵画」への道程

岩淵 順子

…漆とは…



近影 岩淵陽人

漆と言えば、先ず木曾や輪島の盆、食器、膳などの日用品としての漆器が浮かんでくる。漆は、

古くから日本人の生活の中に根付いていただけでなく、遠く欧米の家具・調度にまで名を馳せていた。これは、漆が小文字で「Lacquer」と呼ばれていることから明らかであろう。漆の代表的な工芸技法としては、漆を糊のように使って金粉などを蒔く蒔絵の技法、貝殻を嵌め込む螺鈿という技法などがある。

岩淵陽人の「漆絵画」は、こういった技法を踏まえながらも、作者が研究を重ねて独自に編み出した絵画作品で、日本古来の伝統工芸と一線を画すものと言えよう。色漆を使った古来の「漆絵」には、平面的な文様を描き出す技法が使われており、デザイン的で静かな美しさが特徴的で、装飾的な工芸品とされていた。作者は、画材として漆を用いて、ムーンパン（動き）のある絵画作品に挑戦したのである。

…多彩なジャンル・独特な作風…

作者のテーマは、「日本の祭りシリーズ」「山々に抱かれた故郷の原風景」「アジアの遺跡・文化遺産シリーズ」「ヨーロッパの風景」「静物」「ジャズシリーズ」他、多岐に亘り、

ジャンルも、油彩画・水彩画・水墨画・彩墨画・版画・陶器絵付け・漆絵画と多彩だ。そんな風に紹介すると、一見、こ器用な何でも屋に思われるかもしれないが、作者は、至って不器用者だ。何が不器用かと言えば、雑多に見える作品の底流に、誰のものでもない、誰も真似の出来ない一本の太い筋金が入っていて、磊落な性格ながら、これだけは頑固に譲ろうとしない。これが、独特な「岩淵陽人の世界」を形成している。

…人が大好き…

作者は、人が大好きである。祭りの絵からは、夥しい数の群衆のどよめき、歓声、掛け声、鳴り物が聞こえ、観る人を絵の中の祭りにとり込む。心象風景としての安曇野の風景画にはただ一人の人影もないのに、そこに住む人々の織りなす生活のにおいや人いきれが感じられる。ザクザクが語りかける。石仏や獅子頭や、時には魚が愉快な自画像にみえる。作者は彩墨画に手を染め、日本の各地の祭りを訪ね、祭りに同化し、祭りの心が絵筆となつて、作者のライフワークとしての祭り絵が生まれた。作者は、「祭りや御神体そのものを描くのではなく、そこに集まる人々の爆発するエネルギー、躍動感を描きたい。それは、祭



「御柱祭り」 漆絵画 P100

…何たる早描き…

りや伝統をいつくしみ、守ってきた土着の人々の生きていく証し。」と言う。作者は、毎日規則正しく時間を決めてアトリエにこもって絵を描くタイプではない。ある日、ある時、突然、夜中でも飛び起きて制作が始まる。600号の彩墨画の大作「浅草三社祭り宮入りの図」にとり組んだ時のこと、全く下書きもなく、筆一本で、いきなり大画面の真ん中から描き始め、下から右から斜めから…と、実に奔放に、一気呵成に描いて、あちらこちらから下ろした筆の線が、寸分の違いもなく初筆に収斂していった。記録係を務めていた私としては、動体予測のつかない早書きに途惑ったものである。

…漆との出会い…

洋画家としてスタートを切った作者が「漆絵画」に挑んだきっかけのひとつが、祭りの朱の色である。祭りに特徴的な朱色、神輿や山車や鳥居を強烈に印象づける朱色。彩墨画では、乾くと紙が色を吸ってしまう。「祭りの艶やかさを目いっぱい表現する方法がないだろうか。」と作者は常日頃模索していた。そして、漆に着目した。

漆は、日本でも広く山野に分布、自生するウルシの木からぎ取った乳白色の樹脂から精製されたものを原料とするが、これがやつかない生き物である。温度や湿度にやかまし

くて駄々をこねる。産地により成分が異なり癖っぽい。また、漆の特殊な性質から発色に限界があり、色漆の数が少ない。

ここで強力な武器となるのが、作者の早描きと色彩感覚。スリランカの初代大統領の似顔絵を7分で描きあげ、同国でマスコミの話題をさらった、定評のある早描きで乾燥・凝固に立ち向かう。多彩なジャンルで、特に油彩画において培ってきた独特な色彩感覚が納得するまで、妥協しない。作品には、豊かな色彩と質感によって、動きや物語性が生まれる。漆や貝殻や卵殻の特性が遺憾なく発揮された画面を、光線・方角・角度を変えて見ると、カットバックのような効果が楽しめる。作者は、「漆絵画の工程は、非常に複雑で奥が深い。まだまだ。」と語るが、次々と新境地が開拓されているようだ。

…新大陸へ…

最近、アメリカはロッキー山脈の麓にある美術館から熱烈なラブコールを送られていると聞いているが、近い将来、古来の伝統的な「Lacquer」が見たこともない斬新ないでたちで新大陸に上陸した時、果たしてどんな評価が待っているか、とても楽しみである。(エッセイスト)

山と博物館 第54巻 第2号

発行 2009年2月25日発行

長野県大町市大町八〇五六 一  
市立大町山岳博物館

TEL 0266-23-0111  
FAX 0266-23-1111

E-mail: [sanpaku@city.omachi.nagano.jp](mailto:sanpaku@city.omachi.nagano.jp)  
URL: <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku>

印刷 有限会社 北辰 印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)  
郵便振替口座番号 〇〇五四〇・七・一三三九三

